

心の闇との戦い

【聖書】 創世記 32章 23～33節

その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った。皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福して下さるまでは離しません。」「お前の名は何なのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。ヤコブは、「わたしは顔と顔を合わせて神を見たのに、なお生きている」と言って、その場所をペヌエル（神の顔）と名付けた。ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引きずっていた。こういうわけで、イスラエルの人々は今でも腿の関節の上にある腰の筋を食べない。かの人々がヤコブの腿の関節、つまり腰の筋のところを打ったからである。

【序】 自殺に迫いやる心の闇

信頼が裏切られた時に、私たちの人間関係は深く傷つき、壊れてしまいます。そればかりか、その後の人生に大きな狂いが生じます。人間不信に陥り、他の人との交わりも悪くなり、次第に孤独になります。多くの中学生が国語の授業で学ぶ夏目漱石の「こころ」の主人公は、父親の死後に叔父から財産を横領されて人間不信になりました。そして帝国大学を卒業しながら、積極的に生きて行く意欲を失っていました。

ところが下宿先の自分の部屋においてやった友人のKから、下宿の娘さんに心がひかれると打ち明けられるや、それまで優柔不断だった彼が、「お嬢さんを下さい」と母親に直接交渉をして、Kを出し抜きました。気が咎めて詫言しなければと思うものの、自尊心がそれを許しません。迷いながら縁談が進むうちに、突然Kが自殺してしまい、詫言の機会が永久に失われてしまいました。

幸福であるべき新婚生活に、Kへの思いが黒い影となってつきまとい、彼をおびやかします。自分もまたあの叔父と同じく許されざる人間ではないか。そのことに気付かされた時、彼は闇に突き落とされる思いに襲われました。誰からも切り離された孤立・孤独感に捉われます。これではいけない、妻と一緒に新しく生きていかなければと意欲を奮い立たせようとすると、虚無感にぐいと握りしめられてぐたりとなります。彼は遂に遺書のかたちで告白し、妻には決して見せぬことと書き添えて自殺しました。

【1】 自分の心の闇と格闘する

今日は、先週に引き続いて三代目の族長ヤコブ物語です。ヤコブは兄が受け継ぐ家督相続をど

うしても手に入れたかったので、老いた父をだまして祝福の祈りを横取りしてしまいました。エサウは激怒して彼を殺すと息巻きます。彼は遠く 800 キロ離れた母の実家に逃亡しました。ヤコブは伯父ラバンにだまされながら20年間苦勞します。しかし伯父の家にも居づらくなり、思い切って故郷に戻ることにしました。

殺すと息巻いた兄エサウが待ちうけています。故郷が近づくにつれて、彼の不安は募って来ました。エサウが 400 人の従者を連れて迎えにくると聞くや、ヤコブの恐怖は頂点に達しました。彼は兄の襲撃から身を守る対策を講じます。そして神さまに必死に祈りました。「私は兄が恐ろしいのです。彼は私をはじめ子どもたちとその母親を皆殺すかもしれません」。そして沢山の贈り物を用意してヤボク川を渡りました。

彼はその夜独りだけ、川を渡って引き返しました。そして一晩中何者かと格闘をしています。その相手はヤコブに勝てないとみて、彼の股関節を痛めて足を引きずる体にしました。それでもヤコブは「祝福して下さるまで離しません」と、相手にむしゃぶりつく手をゆるめません。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ」。ヤコブはその場で祝福を受けました。

この物語には不可解な点があります。ヤコブが格闘した相手が誰か、「何者かが」と不明のままです。ヤコブは「どうかあなたのお名前を教えてください」と頼んでも名を明かしてくれません。祝福を与えるお方、それは神さまに違いありませんから、ヤコブ自身は「わたしは顔と顔を合わせて神を見た」と言っています。彼に新しい名前を与え、祝福して下さったのは、神さまに違いありません。

しかし神さまは「お前は神と人と闘って勝った」とおっしゃってイスラエルという名を与えられました。ヤコブはその晩、神と格闘したばかりでなく、人とも格闘して勝ったのでした。これはどういうことでしょうか。私はこう理解します。

彼はエサウの復讐を非常に恐れて、おびえました。居ても立ってもおれなくなったのです。あれから20年過ぎています。しかし父をだまし、兄を出し抜いた行為は人間として信義に反する許されない罪です。その罪についてのいつまでも消えない後悔が、ヤコブの心を晴れやかにしない闇となりました。そして彼を、人を信頼できず、疑わせ、必要以上に恐れ、さいなませてきたのではないのでしょうか。漱石の「こころ」の主人公は、その心の闇にさいなまれて耐えられず、遂に自殺してしまっています。

しかしヤコブは違いました。先週学びましたように、家出してただ独り、石を枕に野宿した人生のどん底で、彼は「見よ、わたしはあなたと共に居る。あなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。決して見捨てない」と約束して下さる神さまの語りかけを確かに聞いていたのです。ですから彼は今、自分を呑み込もうとする心の闇と必死に格闘をすることができたのではないのでしょうか。そして絶望に負け、自殺しようとする自分と全力をあげて格闘し、打ち勝つことが出来たのではないのでしょうか。それ

が「お前は人と闘って勝った」と言われた部分ではないかと思います。

そしてヤコブが自分の心の闇に打ち勝った時に、この自分を新しい名前で呼んで祝福して下さる神さまにすがりついている我が身を見出したのではないのでしょうか。彼は兄に後れを取るまいと、そのかかとをつかんで生まれてきたので、ヤコブ(かかと)と名付けられました。人の物を握って放さない、人を押しつけて良い物をせしめるという名前です。

それが「これからはイスラエルと呼ばれる」と言われました。イスラエルとは、通常は「神と共に励む」と言われていますが、厳密には「神励む」「神治める」という意味だそうです。神さまがヤコブの内で力をふるい、神さまに治められる人間へと変えて下さるということです。ヤコブは心の闇と格闘して、とうとう勝利したのでした。

ヤコブはもう一度念を押して確認したいと思いました。「どうかあなたのお名前を教えてください」。「どうしてわたしの名を尋ねるのか」。そのお方は名乗る代わりに、祝福してくださいました。人間を本当に祝福できるのは、神さましかおられません。ヤコブはそのお方が間違いなく神さまであると、確信できました。

[結] 新しい自分の誕生

私たちは自分の罪深さや、人の悪によって窮地に立たされた時、苦しみあがきます。その時の祈りは、自分を呪ったり、人や世間や神さままで呪って、わめき散らすことから始まります。祈りとは言えない荒れた叫びです。でも格闘する相手がいつの間にか神さまに代わっていくのです。そして神さまが私の叫びを全部受けとめて下さり、私たちのあがきと最後までつき合ってくださいることが、分かってくるのです。

私たちがあきらめずに武者ぶりついて離れなければ、最後には私を勝たせて下さり、私という人間を変えて下さる、そしてお前は神にも勝ったよと喜んでくださる——神さまはそういうお方なのです。「ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、太陽が彼の上に昇った」。何と素晴らしい言葉でしょう。太陽が彼の上に高く昇り、彼を締め付けていた心の闇は消え去りました。新しい神体験が新しい自分の誕生をもたらしてくれたのです。

いやらしい性質のヤコブが、神さまがその人の内で励んでくださり、神さまが治めて下さる人間へと変えられたのでした。「三つ子の魂、百まで」と言います。人間の性質は年をとっても、いつまでも変わらない——これが世間の常識です。でも皆さん、私たちは変れるのです。新しい人間になれるのです。そして新しい人生を歩むことが出来るのです。神さまは私たち一人ひとりを、ご自分に似せて創造して下さいました。しかし私たちの心には、神さまに聞き従って生きることを拒み、自分の思いのままに生きようとする罪深さが生じました。その結果、私たちの内にある神の姿が損なわれ、誰しもが心の闇を持つようになりました。

ダビデも大きな罪を犯しました。預言者ナタンに厳しく指摘されて、迷いから目覚めた時、王の衣を引き裂いて祈っています。「神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊を授けてください」(詩編 51:12)。

命は神さまの手によって創造され、私たちに与えられます。命を新しくして下さるのも、神さまによる以外にありません。ヤコブは祈りを通して、私たちが新しい人間に変えられていくことを、見事に教えてくれています。

どんなに荒れすさんだ叫びであっても、神さまに武者ぶりついて祈るならば、神さまは必ず私の相手をしてくださり、祝福を授けて下さるのです。

完